

伸郎のつぶやき ― 夫婦愛の導くところ ―

苦しみ悲しみのあとに楽しいことが

苦しいこと一つあれば楽しいこと二つ、苦しいこと二つあれば楽しいこと三つあり、これはすべて神さまの贈りものです。

施設に入所されていた画伯で、車椅子生活を続けた方が私にくれた絵だが、梅香も好きな絵だったの
でこの本の表紙にも使わせていただいた。にじみ出るような素晴らしい言葉が書いてある。身体を診て
もらっているお札にと毎年絵を描いて頂き、いつも「えがお」のよい印象が残っている。

私はとても及ばない、人間として立派な方であった。この本のエピソードの何ヶ所かに、この方の絵
を載せて頂いた。心安らぐ癒される絵であり言葉である。すべて神さまからの贈り物であると受け取
り、感謝する心境にはなかなかない。

般若心経にも、聖書にも、また神道にも、宗教はすべてこの心境に到達できることを祈って手を合わせ、
神の思召しとして受け入れ、心に安らぎを求めているものと理解される。

五十六年の伴侶を失った悲しみで心に大きな穴が空いたのを、この言葉のように楽しいことに転換で

きるとは思わなかった。

ふとしたことから、人間だけが持っている「書く」という脳書字中枢を働かせて書きまくるのが効果
的な方法ではないかと思うようになり、このエピソードを書き始めた。

幼児はどこにでも絵を描き、クレヨンで壁や床に字にも絵にもならないものを書きまくることで、人
間らしさをつくっていくのではないかと思っている。

過去に遡り、自分の人生で楽しかったこと、プライドを持たた出来事を訪ね歩き感じたままの言葉を
文字にして、心の中を吐露したいと思うようになり、不思議にすらすらと素直に書けるのが楽しく感じ
るようになったのである。

画伯の言葉がわかってきて、心の穴も次第に埋まって来るこの頃である。悲しかった場面を繰り返し
ては涙する思考の経路から抜け出せなかったのが、書くことで、この思考の経路に変化がきたように思っ
ている。

悲しいこと一つ、安らいだ気持ちになること二つは、仏様にお祈りしながら、誰にでもできるこの方
法を救いとして、少しずつ歩んでいきたいと考えている。